

No. 1

エル・サルヴァドル共和国・エクアドル共和国
陶磁器隊員巡回指導調査団報告書
(平成11年12月)



JICA LIBRARY

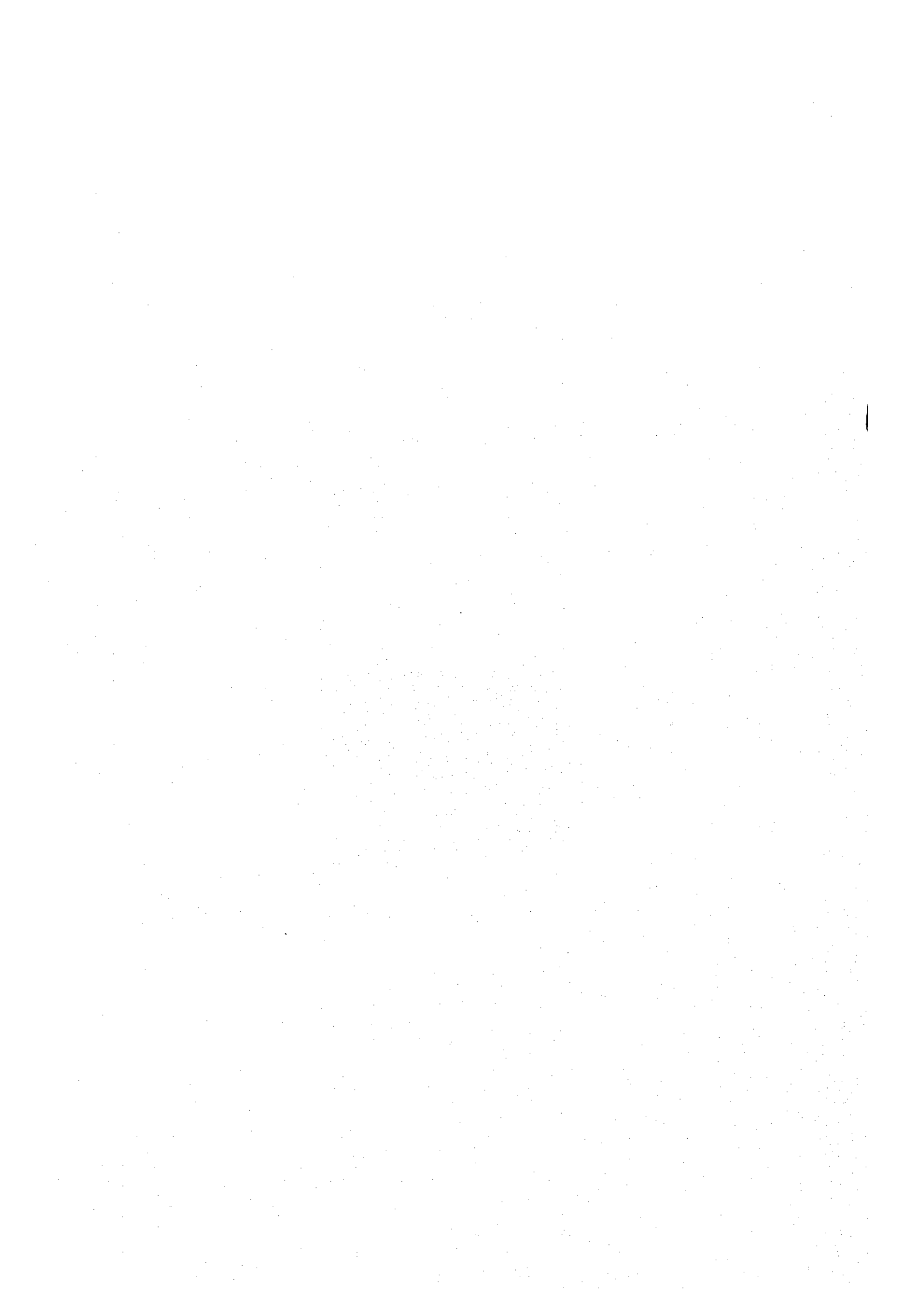


J1158222(8)

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局

青国内
JR
00-09

JICA
LIBRARY



略 語

- CEC : Commission of the European Communities(欧州共同体委員会)
DAC : Development Assistance Committee(開発援助委員会)
EU : European Union(欧州連合)
IBRD: International Bank for Reconstruction and Development(世界銀行)
IDB : Inter-American Development Bank(米州開発銀行)
OECD: Organization for Economic Cooperation and Development(経済協力開発機構)
UNDP: United Nations Development Programme(国連開発計画)
UNTA: United Nations Regular Programme for Technical Assistance
(国連通常技術支援計画)

出 典

- ・ "World Development Report" 1997 The World Bank
- ・ "International Financial Statistics" 1999 IMF
- ・ "Country Profile Guatemala, El Salvador 1999-2000" 1999 EU
- ・ "The Europa World Yearbook" 1997 Europa Publications
- ・ "Global Development Finance 1999" 1999 The World Bank
- ・ 『ラテン・アメリカ辞典』 1989 ラテン・アメリカ協会
- ・ 『開発途上国国別経済協力シリーズ エル・サルヴァドル』第2版 1984 国際協力推進協会
- ・ 『中南米諸国便覧』 1983 ラテン・アメリカ協会
- ・ 『ラテン・アメリカ時報』 1997 ラテン・アメリカ協会
- ・ 『海外生活の手引/中米・カリブ編Ⅰ』 1997 (財)世界の動き社
- ・ 『海外生活の手引/南米編Ⅱ』 1997 (財)世界の動き社
- ・ 最新世界現勢 1999 (株)平凡社
- ・ 最新世界各国要覧9改訂版 1998.7. 東京書籍 (株)
- ・ データブックオブザワールド 1999 Vol.11 (株)二宮書店
- ・ 世界年鑑 1999 共同通信社
- ・ ODA 白書 1998 外務省
- ・ エクアドルの経済社会の現状 第4版 1993年
- ・ ラテンアメリカ協会資料 1989年
- ・ エクアドル共和国概観 1994年 外務省
- ・ 巡回指導対象の各青年海外協力隊員報告書及び関連受入希望調査表
- ・ 平成10年度年次報告書(エル・サルヴァドル、エクアドル)



1158222 (8)

目次

1 調査概要

1-1 調査団構成	1
1-2 調査日程	1
1-3 調査目的	1
1-4 調査内容	1
1-5 主要面談者リスト	1

2 調査結果概要

2-1 陶磁器隊員巡回指導	4
2-2 その他職種隊員活動状況視察	5
2-3 所感	5

3 エル・サルヴァドル共和国

3-1 一般的状況	6
3-2 国家開発計画	8
3-3 政府開発援助実績	9
3-4 我が国の援助動向	9
3-5 現地調査結果	10

4 エクアドル共和国

4-1 一般的状況	17
4-2 国家開発計画	19
4-3 政府開発援助実績	20
4-4 我が国の援助動向	20
4-5 現地調査結果	21

添付資料

●エル・サルヴァドル国

1 エル・サルヴァドル国活動視察隊員位置図	32
2 エル・サルヴァドル国隊員配置図	33
3 隊次別・職種別派遣実績	34
4 エル・サルヴァドル国 長島隊員（陶磁器）に係る新聞記事	35

●エクアドル国

1 エクアドル国活動視察隊員位置図	36
2 エクアドル国隊員配置図	37
3 エクアドル国協力隊配属先別派遣状況	38
4 隊員受入動向／重点職種分野別 派遣計画	39
5 基本派遣計画	40

●巡回指導写真	42
---------	----

1 調査概要

1-1 調査団構成 (3名)

- ア 団長/派遣計画 伊藤 富章 (Mr. TOMIAKI ITO)
国際協力事業団 青年海外協力隊事務局 国内第二課
課長代理
Deputy Director, Recruitment Division, Secretariat of
JOCV, JICA
- イ 技術指導 大津 忠男 (Mr. TADAO OTSU)
益子焼 香取窯 陶芸家 (陶磁器技術専門委員)
Potter of Mashiko-yaki, Katori-gama
- ウ 業務調整 守屋 貴裕 (Mr. TAKAHIRO MORIYA)
国際協力事業団 青年海外協力隊事務局 国内第二課
Staff, Recruitment Division, Secretariat of JOCV, JICA

1-2 調査日程

平成11年9月29日(水)～10月10日(日)(12日間)

(詳細は別紙日程表参照)

1-3 調査目的

- (1) 陶磁器隊員の活動状況視察及び指導・助言
- (2) 陶磁器隊員の要請背景調査及び意見交換

1-4 調査内容

- (1) 陶磁器隊員の活動状況、先方実施機関の実施体制を調査し、問題点等を把握した上で、助言・指導を行う。
- (2) 先方実施機関の陶磁器隊員に対する評価及び期待について調査し、今後の活動計画を検討する。
- (3) JICA 事務所・先方実施機関に要請背景、ニーズ等について調査し、今後の派遣計画を検討する。

1-5 主要面談者リスト

主要面談者については別紙リスト参照。

(調査日程)

日順	月/日	曜日	行程
1	9/29	水	成田→→サン・フランシスコ経由→→
2	9/30	木	→→サン・サウザンズ着 ・JICA 駐在員事務所打合せ ・障害者の陶器工房 (ACOGIPRI) (責任者: イリオン・ヒロ) 隊員活動視察・意見交換 (陶磁器: 長島慶明隊員) ・日本大使館表敬 (湯沢三郎大使、石井一等書記官) ・国立芸術センター (CENAR) (校長: カロス・カニヤ) 隊員活動視察・意見交換 (陶磁器: 長島、美術: 大島慶一・関根香織・吉田利雄隊員) ・隊員連絡所 陶磁器隊員意見交換 (陶磁器: 鈴木しのぶ隊員)
3	10/1	金	サン・サウザンズ発→→ラ・パルマ着 ・「エル・トラシット」文化・経済社会開発協会 (責任者: サウザンズ・セバダ) 工房視察・意見交換 ラ・パルマ発→→サン・サウザンズ着
4	10/2	土	資料整理
5	10/3	日	サン・サウザンズ→→サン・ホセ経由→→キト着
6	10/4	月	・JOCV 調整員事務所打合せ ・エクアドル外務省経済協力局表敬 (ウレ・ス・マ・プ・マ局長、フェリナ・ブシリ事務官) ・日本大使館表敬 (鈴木邦治大使) ・アトクチョ保健所 隊員活動視察・意見交換 (看護婦: 長谷川紀子隊員)
7	10/5	火	キト発→→プヒリ着 ・プヒリ・ウイタ地区手工芸品製作者協会 (担当者: モレノ) ・隊員活動視察・意見交換 (陶磁器: 平良和佳子隊員) プヒリ発→→キト着
8	10/6	水	キト発→→チャウピ着 ・ル・エミリア・サ小学校 隊員活動視察・意見交換 (体育: 佐々木英恵隊員) チャウピ発→→キト着 ・職業訓練センター・キト校 隊員活動視察・意見交換 (電子機器: 谷智美隊員)
9	10/7	木	キト発→→グアジャバ着 ・ヒデオ・グチ小学校 隊員活動視察・意見交換 (小学校教諭: 豊口靖子隊員) グアジャバ発→→オタバロ着 ・ハンピ・ワシ保健協会 隊員活動視察・意見交換 (保健婦: 東迫恵美隊員) オタバロ発→→キト着 キト発→→サント・ドミンゴ着
10	10/8	金	サント・ドミンゴ発→→グアヤキル着 グアヤキル発→→ニューヨーク着
11	10/9	土	ニューヨーク発→→
12	10/10	日	→→成田着

主要面談者リスト（敬称略）

1 エル・サルヴァドル共和国

(1) アコヒプリ（陶器工房）

責任者 エイリーン・ヒロン

職員 ロザリオ

(2) 国立芸術芸術センター

センター長 カルロス・カーニャ

コーディネータ アグレダ

職員 ドミンゲス

職員 アルバロ

(3) エル・トランシット

経営者 サルヴァドール・セペダ

職員 フィゲラ

職員 エミリオ

(4) 在エル・サルヴァドル日本大使館

特命全権大使 湯沢 三郎

一等書記官 石井 清史

(5) JICA/JOCV エル・サルヴァドル駐在員事務所

所長 上島 篤志

調整員 松岡 武史

調整員 江川 由美

2 エクアドル共和国

(1) エクアドル共和国外務省経済協力局

局長 ロウドレス・プマ・プーマ

事務官 フェルナンド・ブシェリ

(2) プヒリ・ヴィクトリア地区手工芸品製作者協会

職員 モレノ

(3) 在エクアドル日本大使館

特命全権大使 鈴木邦治

(4) JOCV エクアドル調整員事務所

調整員 寺内 光夫

調整員 福原 明浩

調整員 若松 聡美

調整員 攪上 正彦

2 調査結果概要

2-1 陶磁器隊員巡回指導

エル・サルヴァドル、エクアドル両国における陶磁器隊員の任地を訪れ、隊員報告書等を基に、活動の現況、施設環境の現状、配属先機関の実施体制、今後の活動計画等について調査した。この調査で明らかとなった問題点・疑問点などについて、技術指導及び今後の活動上の助言を行った。

いずれの陶磁器隊員も、赴任後1年程度（平成10年度1次隊、2次隊）経って配属先の状況が把握できた中で活動においての問題意識を持ち始めている頃であり、積極的に質問・意見が出され、同行の陶磁器技術専門委員と意見交換を行った。

(1) 長島隊員（エル・サルヴァドル）

ア 陶磁器の原料は輸入にたよっており、その資金手当の問題から、安価で購入できるよう国内において原料が入手できないか調査を行い、現地の自然に適合した作品を作るよう指導した。

さらに、陶磁器においては原料の均一化が重要であり、そのため隊員支援経費で購入した粉碎機（1台）が大変役立っていた。これは隊員自身のアイデアで購入したものだが、同専門委員も評価している。

イ 高火度（1,200℃）での試作品を粘土、釉薬などの研究と合わせて行うこと、生素地乾燥ときによる製品の切れ（傷）に対する乾燥保管方法などについて指導した。

(2) 鈴木隊員（エル・サルヴァドル）

ア 同隊員は病気療養中（於隊員連絡所）であったため、活動していた工房の視察及びその活動状況調査の前に活動状況聴取とともに見舞いを行った。徐々に回復しつつあり、本邦帰国療養後再度活動を継続することを確認した。また、現地での活動結果（物の考え方・見方、感性）が陶芸家として将来とも役立つことを助言しておいた。

イ エル・サルヴァドル国においては陶磁器製品があまり日常生活に使用されておらず、また高価なものとなるため、国内での市場開拓が困難であり、海外向けの製品となっている。さらに、人材（賃金が安いなどの理由でなり手がいない）、原料（輸入等のため高価）などの問題があり、その対応が困難な状況にある。なお、人材については日本も同様の経験（歴史）を踏まえていることなどから、社会状況がある程度変化しないと難しく（日本でも近年陶芸に対する認識が変わり、陶芸として扱われるようになるなど見直されている）、あまり前向きな助言はできなかった。

(3) 平良隊員（エクアドル）

ア 配属先変更により1999年9月中旬から現任地での活動を開始したところである。

現在は活動地域の状況（各陶工家庭の状況）を調査している。同隊員に同行し、3家庭を視察したが、同地域での問題点として、低温焼成であるため釉薬に鉛を多量に使用しているということである。この製法は伝統的なもので、製品の嗜好性の問題があり有害とわかっていても使わざるを得ない状況にある。

イ 焼成におがくずを使っているのので、鉄分の多い土を探し、黒陶などをつくってみることを助言した。

以上のように各陶磁器隊員のこれまでの活動実績の良い点を評価し、問題点を明確にすることで、今後の隊員活動における評価した点をより促進することと、課題を絞り込みその方向づけができたことは、本巡回指導の成果と言える。なお、関係機関及び事務所・大使館からも同様の調査団派遣が今後とも継続して行われるよう要望があった。

また、技術専門委員は陶磁器隊員の選考を担当していただいております、同隊員にとって、その助言には重みがありかつ励みになったように見受けられた。

2-2 その他職種隊員活動状況視察

今回の陶磁器隊員の巡回指導調査に合わせ、同陶磁器隊員と同じ配属先あるいは近隣任地にいる他職種隊員（美術、看護婦、体育、電子機器、小学校教諭、保健婦）の活動状況及びその実施体制等を視察した。

各隊員の活動状況は予め受入希望調査表、隊員報告書により把握していたが、具体的な活動等を見るとそれらに記載されていない内容や報告書で理解できない施設環境、実施体制などが具体的に理解でき大いに参考になった。隊員の活動組織は NGO など小規模な組織であり、資金手当が不十分（他の NGO による支援、学校の場合は PTA の負担などに頼っているため）などの理由により組織・実施体制が整っていなかったり、維持管理が十分でないことなどが見受けられた。

活動内容には受入希望調査表と多少の違いがある（要請時と派遣時の時間差等による）ところもあったが、各隊員が職場の責任者と話し合いをするなどしながら対応していて、特段問題となっているところはなかった。

各活動内容はそれぞれニーズに応えたものとなっていて関係者から大変感謝され、隊員ひとりひとりの活動に対する評価も高かった。

2-3 所感

各隊員活動視察をした結果、配属先が NGO 組織などのため予め想定されたことではあるが、それぞれの施設・体制・予算のどれ一つを取ってみても不足がち・困難な環境下で活動しており、その中で創意工夫・努力をして対応していて、各隊員の所属長にヒアリングしても、それぞれの隊員に対する評価（及び期待）が高かった。また、隊員の必要性も感じられた。

各活動現場はその地域で必要とされた活動を行っており、特に学校、病院関係の活動はその地域住民の生活により密着したものとなっている。

また、隊員活動に必要な資金手当（草の根無償、隊員支援経費等）について、内容・維持管理能力など、種々検討すべき点を確認し、対応することも必要と思われる。

隊員派遣については、要請から派遣までに時間を要した場合などには職場環境・活動内容の違いが生じることがあるため、調整員が適宜再調査することが必要と思われる。しかしながら、日常業務（安全対策を含む）、新規要請案件発掘等、調整員業務も多岐に渡っているところ、現状からすると人数増を含めその実施体制を強化する必要があると感じた。

3 エル・サルヴァドル共和国

3-1 一般的状況

(1) 位置・地形

エル・サルヴァドル共和国は、中米のほぼ中央、北緯 13 度 24 分～14 度 24 分、西経 87 度 39 分～90 度 8 分に位置する。国の北部および東部はホンジュラス、西部はグアテマラに隣接し、南側は太平洋に望む。国土面積が約 21 千 km² (日本の約 0.06 倍、九州の約半分) と中南米諸国の中で最も小さい農業国家である。

内陸部にアパネカ山脈があり、同山脈中にイサルコ、ラメレベックなど、1,000m～2,000m 級の火山がある。

(2) 気候・気温

エル・サルヴァドルは熱帯性 (サバンナ) 気候で 11 月～4 月が乾期、5 月～10 月が雨期となっている。

サン・サルヴァドルの月平均気温 (°C) は以下のとおり。

1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
22.2	22.7	23.9	24.7	24.2	23.2	23.4	23.2	22.7	22.8	22.5	22.2

(3) 人口・民族・宗教

人口は 591 万人 (1997 年 IMF 資料) となっており、人口増加率 2.2% (1996～97 年) である。中米 5 ケ国の中で最も狭小で、人口過密な国 (人口密度 280 人/km², 1997 年) である。首都はサン・サルバドル (人口約 120 万人超) である。大多数がスペイン系白人と先住民の混血であり、白人 10%、先住民 5%、混血 85%となっている。

エル・サルヴァドルの先住民はマヤ系のピピル族であるが、植民の過程を通じ、混血が進んだ。宗教の比率はカトリック 56.7%、プロテスタント 17.8%、その他 2.3%、無宗教が 23.2%である。

(4) 政治・経済

エル・サルヴァドル共和国は、1821 年宗主国のスペインから独立した。

1979 年より政府軍と反政府ゲリラ (ファラブンド・マルティ民族解放戦線 FMLN) との内戦が続いていたが、1992 年 1 月にメキシコで和平協定が調印され、内戦が終了した。しかしながら、内戦の影響による雇用問題、帰還者・避難民等の社会復帰、内戦による復興等、経済社会的問題など多くの緊急課題を呈しており、国家開発計画においても重点分野に位置づけられている。

1994 年 4 月に国会議員等の選挙が実施され、ARENA (国民共和同盟) のアルマンド・カルデロン氏が大統領に就任 (1994 年 6 月) した。基本政策として中米重点主義、特に米国との関係を重視し、東欧諸国とは政経分離で経済関係を促進し、高い経済成長を達成したにも関わらず、国民の生活・労働条件改善に繋がっていないとの認識等により 1997 年 3 月の中間選挙で大敗した。その後、1999 年 3 月の大統領選で国民共和同盟のフランシスコ・フローレンス氏が当選し、6 月に就任 (任期 5 年) した。

経済においては、1993年にエル・サルヴァドル、グアテマラ、ホンジュラス、ニカラグアの4ヶ国で中米自由貿易圏を発足させた。同国の貿易はコーヒー、砂糖などの一次産品を輸出し、石油、消費財、中間財、資本財を輸入するという構造になっていて、経常収支は1987年以降赤字が続いており、輸出拡大などによる赤字削減が中長期的課題である。政府は公営企業の民営化を推進しており、1998年1月に電力供給公社を米国、チリ、ベネズエラの企業に売却し、9月には電力公社 CTE の51%をフランス企業に売却するなどを行っている。

経済の課題は、以下のとおりとなっている。

- a) 良好なマクロ経済の維持（インフレ率抑制、財政赤字削減等）
- b) 所得格差の是正、貧困対策、地方開発
- c) 輸出の促進と工業再編成
- d) 世界経済への参加促進と地域経済統合
- e) 経済成長と環境保護の調和
- f) 国家所機構・法制度の一層の近代化、等

経済指標

	1995年	1996年	1997年	増加率 (90-96年平均)
人口(千人)	5,623	5,810	-	2.4%
総額 GNP(百万ドル)	9,057	9,868	-	-
一人当たり GNP(ドル)	1,610	1,700	1,810	3.5%
財政収支(百万コロン)	-455.2	-1,841.2	-	-
対外債務残高(百万ドル)	2,590	2,894	3,282	-

1 US ドル=8.755 コロン (1998年11月末)

*GDP の産業別構成(1997年): 農林水産業 13.0%、鉱業 0.4%、工業 21.9%、サービス業他 64.7%

*実質 GDP 成長率 25.4% (IMF 資料)

(5) 社会状況

ア 雇用

全人口に占める就業人口の割合(1990~93年)は41%で、ラテンアメリカおよびカリブ地域の平均レベル(41%)にある。

イ 人口動態

エル・サルヴァドルは人口密度がラテンアメリカおよびカリブ地域の中で最も高い人口密度の高い国(280人/km² 1997年)である。人口の分布状態は都市への集中傾向は強くなく、45%(1994年)と地域平均を下回っている。国土狭小で人口過密であるため、米国などへの海外移住が盛んである。

ウ 保健医療

保健医療に関する都市と農村のギャップは大きく、特に安全な飲料水を確保できる割合は、都市部78%、農村部22%となっており、農村部における衛生環境整備が急務となっている。

エ 教育

内戦等により、教師不足、教育施設の破壊、教育環境の悪化等、国民教育に大きな影響を与え

ており、政府は、特に農村地域の教員不足、教室不足を解決すべく UNDP 等の協力によるプログラムを進めている。小学校就学率 79%、成人識字率 72%となっている。

オ 環境

環境では、森林（自然林）伐採、土壌侵食、河川の水質汚濁（90%以上が汚染）など危機的状況にあり、特に、河川汚染による感染症、消化器官の病気が深刻な問題となっている。また、都市部においては内戦による都市部への人口集中による都市衛生（ゴミ、下水、生活排水等）が問題となっている。

3-2 国家開発計画

経済社会開発 5 ヶ年計画（1994～99 年）の要旨は以下のとおり。

(1) 目標：これまでの経済安定化の継続させ、経済の国際競争力の強化による雇用創出

(2) 主要政策

a 経済

- ・マクロ経済・財政・金融体外開放に備えた国内経済の体制強化
- ・輸出促進
- ・外国投資誘致のための体制整備
- ・徴税機能の強化
- ・財政支出コントロールの強化
- ・生産活動の成長と物価安定に見合う流動性の維持
- ・金融セクター競争力及び能率強化、等

b 教育

- ・社会開発基礎教育の就学率向上（1993 年 69.2%→1999 年 79.1%）
- ・農村部での文盲率の低下
- ・幼児・妊産婦の健康維持・罹患対策
- ・農村部・都市部周辺の居住環境改善
- ・上下水道普及率の向上
- ・小規模企業振興

c インフラ整備

- ・経済開発インフラ電力サービスの品質及び信頼性の向上
- ・電気通信への民間企業参入奨励
- ・都市及び都市間交通網整備
- ・港湾近代化
- ・農業の近代化・生産性向上

3-3 政府開発援助実績

(1) 我が国の ODA 実績

暦年	贈与			政府貸付		合計
	無償資金協力	技術協力	計	支出総額	支出純額	
95	26.28(54)	4.14(8)	30.43(62)	18.35	18.35(38)	48.78(100)
96	29.15(41)	8.0(11)	37.24(53)	33.16	33.16(47)	70.40(100)
97	22.87(34)	10.74(16)	33.62(49)	34.63	34.63(51)	68.25(100)
累計	159.56(57)	34.39(12)	194.00(70)	114.17	85.09(30)	279.07(100)

(2) 国際機関・先進国等の援助動向

DAC 諸国、ODA NET (支出純額、単位：百万ドル)

暦年	1位	2位	3位	その他	合計
1994	米国 142.0	ドイツ 29.6	日本 21.0	44.4	237.0
1995	米国 115.0	日本 48.8	ドイツ 44.0	35.9	243.7
1996	米国 74.0	日本 70.4	ドイツ 37.3	47.6	229.3

国際機関、ODA NET (支出純額、単位：百万ドル)

暦年	1位	2位	3位	その他	合計
1994	IDB 31.7	CEC 24.8	UNDP 15.5	8.8	80.8
1995	CEC 22.7	IDB 16.8	UNDP 8.3	14.6	62.4
1996	CEC 30.0	IDB 26.7	UNDP 18.0	13.2	87.9

※ IDB: 米州開発銀行 CEC: 欧州共同体委員会

3-4 我が国の援助動向

エル・サルヴァドル国に対する我が国の援助は、同国の民主化定着、市場志向型経済導入に向けた努力、和平プロセスの順調な履行を評価し、また、同国を含む中米地域の安定が中南米の平和と繁栄に寄与すること等を踏まえ協力することとしている。

我が国の対エル・サルヴァドル援助実績は 1991 年度から大幅に拡大し、1996 年には ODA 諸国第 2 位である。

我が国の援助は、以下を重点分野としている。

a 生産部門活性化に資する分野（運輸・交通、農業生産基盤、エネルギー関連）

※ 経済発展の潜在能力が大きいため生産部門の活性化に資する支援として、経済インフラの整備及び人作り・技術移転が重要である。

b 社会開発分野（教育、保健・医療）

※ エル・サルヴァドルは人口に対し国土が狭く資源も乏しいため人的開発が不可欠であり、初等教育の充実、教員の養成が急務である。また、社会的弱者、貧困層を対象とした地域医療サービス分野に力を注ぐ。

c 環境（上下水道、廃棄物処理）

※ 持続的な経済開発のためには開発と環境の両立が不可欠との観点から、水資源の有効利用や全国的に深刻な問題となっている汚濁水の処理、大都市の産業廃棄物への協力が重要。

d 民主化・経済安定化支援

※ これまで民主化と経済安定化のための直接的支援を行ってきたが、今後とも NGO 活動の

重要性をも念頭においた草の根無償の活用及びコモン・アジェンダの下での日米協力等による協力を継続していく。

●実施上の留意事項

- ・ エル・サルヴァドルに対しては、内戦終結後の緊急支援、復興支援と段階的に援助が強化された一方、経済発展による所得水準の向上を反映し、今後は無償資金協力から有償資金協力、技術協力を中心とした経済協力スキームに重点を移行していく。
- ・ 内戦による経済、社会インフラの荒廃が著しいことを踏まえつつ、援助分野の優先度を検討する必要がある。
- ・ 実施体制の強化等、援助の受入能力の向上が必要である。

3-5 現地調査結果

(1) 協力隊員配置状況

エル・サルヴァドル国の協力隊員の派遣状況(1999年9月1日付)は添付資料(エル・サルヴァドル国の2)のとおり、派遣中の隊員は42名(うち女性隊員は18名)である。

首都であるサン・サルヴァドルには約半分の22名が、その他首都周辺の都市を中心に各地方都市に残りの半分が派遣されている。

また、今回巡回指導対象の陶磁器隊員は、現在2名派遣されている。

(2) JICA/JOCV 駐在員事務所との協議結果

ア 協力隊派遣計画(及び方向性、あり方等)

現在の派遣隊員の分野は、1)教育、2)農林水産、3)医療を三本柱として考え受入配置しているが、今後は医療の中でも特に「地方医療サービスの向上」の為に支援が必要と考えており、治安面を考慮しながら検討しているとのことである。

イ 要請背景調査

近年は環境分野からの要請等もあり、その背景調査を行う必要があるのだが、他の職種についても同じことが言えるように、調整員自身の専門性によりあまり得意な分野(職種)でない場合は、調査及び受入要望調査表の記述については具体性に欠ける部分が出やすいとのことであったが、「要請背景調査ハンドブック」の活用を図ることや、必要に応じ本邦に問い合わせなどの対応を図ることが必要である旨説明しておいた。

なお、同ハンドブックについては、必ずしも全職種とも同じレベルに取りまとめられておらず、さらに内容の充実にも努める必要性を感じた。

(3) 隊員活動視察結果

今回の調査においては主として同国に派遣されている陶磁器隊員に対し、巡回指導をすることと、併せて今後の派遣計画等に資するという観点から他職種の隊員についてもその活動状況を視察した。

以下に各隊員毎の視察結果を取りまとめた。

ア 長島慶明(陶磁器:1998.7.13~2000.7.12 10年度1次隊)

長島隊員の配属先は、陶器工房と国立芸術センターの2つの職場で活動を行っている。同施設、実施体制、活動内容等は以下のとおりとなっている。

(ア) ACOGIPRI (陶器工房)

障害者(聴覚障害者)で運営されている陶器工房。そのため会話は手話による。同隊員は月・水・金の午後に活動を行っている。

a 組織(人員配置:12名)

- 1) 責任者 :エイリーン・ヒロン
- 2) 工房長:マノロ
- 3) ロクロ師:ユクトール、メメ
- 4) 工練り:ゴト、ロベルト
- 5) 絵付け師:アンシテス、ネルソン
- 6) 施釉:ロザリオ
- 7) その他:セシリア、マルコ、シグリフェド

b 成形法:ロクロ式、板作り ガス窯(1,150℃前後で焼成、写真2)

c 問題点:製工法、焼成、釉薬、原料の輸入(予算不足の一因)

d 輸出品の問題点:欠品が多いため、赤字で経営困難が続いている。

e 隊員として求められているもの

- 1) 現状製造工程について改善の研究
- 2) 高火度焼成のための坯土・釉薬のテスト

f その他

- ・ 隊員支援経費にて「粉碎機」1台を購入し、土の粉碎に役立っている。
- ・ 分業制で持ち場が決まっているが、人手不足のため掛け持ちとならざるを得ない。しかし、夫々の技術を習得するにはそれなりに時間と技術指導も必要である。
- ・ プラスチック食器を多く使っているため、同国における日用品としての陶磁器普及は難しい。デザイン開発が必要。
- ・ 専門的な機材を導入しないと解決できないレベルの問題まで来ている。
→「専門家レベルではないか」と考えている(隊員)。
- ・ 職業訓練校教師、障害者リハビリテーション施設指導者などが習いに来ている。

(イ) CENAR (国立芸術センター)

同隊員は、火・木・金の午前に活動を行っている。

a 組織(人員配置)

- 1) 陶芸学科:主任(アルバロ・クエスト)、マウリシオ、オスカル
- 2) 製工係:フランシス

b 生徒:10名程度、年齢様々で女性多い

c 授業:午前の授業 アルバロ、クエスト



写真1 巡回指導の様子
右からヒロン氏、長島隊員、調査団

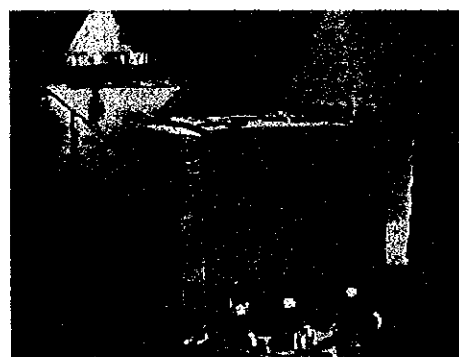


写真2 ガス窯



写真3 教室の様子

午後の授業 マウリシオ、オスカル

- d 授業内容：絵付け、手びねり成形、鋳込み成形
- e 窯：アメリカ製の電気窯（2台）1,150℃前後で焼成
- f 要望 ガス窯（高火度陶芸）が要望されているが、そのためには以下の課題がある。
 - 1) 原料、2) 予算、3) 学長の承諾

(ウ) 業務計画（業務内容）上の活動成果及び課題は以下のとおり。

- a 活動成果
 - ・焼成法や製工法改善は試行錯誤段階で継続必要。
- b 課題
 - ・ガス窯製作の機材購入ルートの確立
 - ・製工法改善
 - ・設備導入もまだ十分でない。

(エ) 活動状況視察結果

a 陶器工房（ACOGIPRI）

(a) 隊員の業務の継続性（が重要）

日本は日本窯業の長い歴史、文化伝統があり、これらの変遷を踏まえた結果、現在の技術に至っている。したがって、エル・サルヴァドル国においても、同様のことが言える。原料を輸入に頼るのではなく、国内における原料調査（地質調査データなどによる）を行い、現地の自然に適したものを作り出すことが必要である。さらに高火度（1,200℃以上）での試作品を粘土、釉薬などの研究と合わせ、継続してやってみることも必要である。

(b) ガス窯

- ・8～10年前に援助された窯（1,200℃の窯）1つと、大学生製作の窯がある。

しかし、大学生製作のものは、つくりが粗雑で耐火性に乏しく、高温では実際には焼けない状況である。価格は不明。燃料はガスで、援助による窯については、週に2～3回焼くので週に1～2回はガスをタンクに満杯にしている。

(c) 製品の状況

- ・生素地の乾燥ときによる切れ（きず）がある。篩は#60を使用している。坏土の保管（ネカシ）が大事である。
- ・釉薬の原料をいかに安く手に入れるかが課題である。
- ・原料の均一化（確保）が重要である。（理由：不均一の場合、製品が変わる為）
- ・隊員支援経費にて粘土の"粉碎機"を1台購入し大変役立っているとのことである。

→ 粉碎機購入により、はたき土製法^{※1}がたやすく出来、フィルタープレス機なしの水ひ法^{※2}だけでは粘土を確保していくのが難しく、その問題点を解消することができた。

^{※1}はたき土製法：原土を粉碎し、ふるい分けした土に水を加え練って坏土をつくる。

^{※2}水ひ法：土を泥水にして漉し、日なたに干して余分な水分を除く方法。

・1,200℃で焼いたコーヒーカップを見せてもらった(写真4)が、フラットな色合いのものでよく焼き締まったものが見えている。低温で焼いた四角いオープン皿(写真5)やスープボウル等も見せてもらったが、焼き締りに乏しいため、水漏れがしている。日常製品を主に作っていて、置物などはあまりやっていない。



写真4 コーヒーカップ

・SHOP 商標"SHICLI POTTERY" (SHICLIとは、食事のときに使う弓状の木製道具のこと)

(d) 課題等

・日常の製作作業に追われ、土・釉薬の研究がなかなかできない。また、製作を担当する人手が足りなく追加の職人が欲しい。しかしながら、給料が低く職人が辞めていってしまう。特にロクロについてはその技術習得に時間を要するが、その職人も現在一人しかいない状況である。

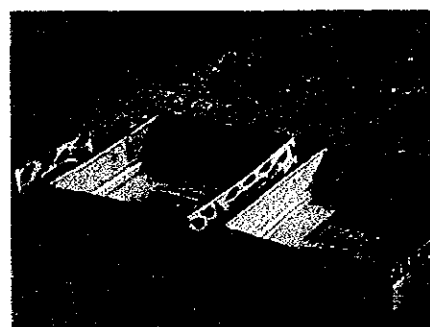


写真5 オープン皿

・米国・メキシコ・グアテマラに製品を輸出していて、同じデザインの製品の注文が一度に600個も入ることもあるが、一方、欠品を出すこともあり、品質を落としている面がある。

・責任者のヒロン氏は、「人手が欲しい。そのためにすぐに修得できる鑄込み成形のラインをつくって、人手を確保したい。」と言っていた。これに対し、長島隊員、大津団員から、「ロクロ引きで品質の良い製品をじっくり作っていくべきである。」とのコメントだった。

・エル・サルヴァドル国内での販路開拓と陶磁器製作の普及に何か案がほしい。

(e) 指導・助言等

・長島隊員には、製作面より、土・釉薬の研究に時間を割かせるべきである。

・ACOGIPRI と CENAR の2ヶ所を午前と午後に分けて活動しているが、全工程をじっくり見て、指導・研究する時間がないので、今後は ACOGIPI にて全工程を見るようにしたい。CENAR には別の隊員を要請中である。

(f) 質疑等

(Q-1)大津：エル・サルヴァドルの販売拡大をどう考えているのか？

(A-1)ヒロン：ろくろ師が現在1人しかいない。もう一人雇いたい。しかしながら、アメリカなどから1回あたり約600個の注文があるなど、数が多いときもあり、これらに対応するには、ろくろでは困難なため(3~4人のロクロ師がいれば可能だが)、鑄込み成形による製作に対応をしていく必要がある。

(A-1-2)長島：欠品もあり質の良いものを作ることも必要である。

(Q-2)大津：30年前のエル・サルヴァドルの焼き物をもっているが、現在の製品はよくなってきているか。

(A-2)長島：土器から陶器に変わってきている。店にはグアテマラとの交換展示も行っている。

b 国立芸術センター(CENAR)

(a) 実施体制

Mr. CARLOS CANASによると、「センターで働くには人も物も揃っており活動上何の問題もない。」とのことである。

(b) 質疑等

(Q-1) 大津：エル・サルヴァドルにおける陶磁器をどう考えているのか？

(A-1) アルバロ：高火度焼成研究をやりつつ（ガス窯が欲しい）、地方展開を図りたい。地方に工房を持ちたいという人もいる。歴史的なものの研究のみならず、近代的（現代的な）ものの開発・研究を合わせて行っていきたい。

陶芸学科のクェスタ氏は C/P 研修にて、本邦で研修を受け、当国内での陶芸家の第一人者である。グアテマラから輸入した土及びラ・パルマの土などによる研究も行っている。原料をどう活かすかが課題となっている。

隊員をいくつかの地域に派遣して、原料等の状況につき、協同組合をつくり定期的な会合・開催などによる情報交換を行っていききたい（中期的計画）。

製土調合もし易く、現在良質な原土を入手し新しい素地作りの研究（高火度焼成に適した素地など）を行っている。

*（釉薬原料など微細粉碎する為の機械）を製作するための「モーター」を支援経費で購入し、ポットミル機を製作している。

イ 鈴木しのぶ（陶磁器：1998.12.07～2000.12.06 10年度2次隊）

同隊員は活動中に腰などを痛め、退院後連絡所にて療養しており、面会及び見舞い等を行った後、同隊員の活動現場を視察した。

(ア) 配属機関：文化芸術審議会 (Consejo Nacional Para la Culture y el Arte)

(イ) 配属先：Asociacion de Desarrollo cultura Economico y social

"El transit" Tienda: Ceramica "San Silvestre"

(ウ) 組織（人員配置）

1) 所属長： Mr. Salvader Zepeda（本職は弁護士）

2) ロク口職人： Domingo Figuera
→高校があり、午前と月・火の午後は働いていない。11月に卒業見込み。

3) 工房管理・釉薬焼成：Mr. Jose Emilio
→他の仕事（コーヒー会社会計係 月～金 09：30-17：00）を優先して仕事している。工房には朝1時間と夕方に勤務。週末に大学に通っている。

4) 店の管理： Ms. Margalita



写真6 販売店

5) アルバイト： Carlos

→高校生で仕事がある時のみ勤務。夕方から工房に来る。

6) 販売： Tina (木・土・日の店の販売)

7) 鈴木しのぶ隊員： 8:00~17:00 (月~金)、8:00~12:00 (土)

(昼休み 12:00-13:00)

(エ) 経営状態

所属長に聞いたところ経営状態は悪い。売り上げを取り戻すことが目標。

(オ) 工房の状況

活気がない。活気を取り戻すことが目標である。

(カ) 業務成果及び課題

a 成果

隊員評価ではある程度成果がでている。

- 1) デザイン開発・改良
- 2) 工房の仕事の流れづくり
- 3) 人材育成
- 4) 民芸品店・市場調査
- 5) 他陶器産地調査
- 6) 市場開拓

b 課題・問題点

- 1) 人材育成
- 2) 工房内労働者の確保

(キ) 任国の状況等

a 日常的に食器に陶磁器製品を使うことが基本にないため、陶磁器の位置づけが日本と全く違う。

Ceramica (低火度であっても釉薬をきちんとつけ、焼成して仕上げる焼き物) などもあるが 20~30 コロン (現地通貨 1 コロン=約¥13) /個と高価であり、海外向けの製品としてを作っている状況である。工房の製品もこれに属するため、国内での市場開拓が困難であり、ある程度の精度の高い製品が求められるため、品質向上を施す必要もある。また、人材、工房としての基礎固めも必要である。

b グェタヒアグア (モラサン州) ではププサ (現地風お好み焼き) 用のコマルや水瓶などの土器をロクロなど全く使わず、手のみでつくりあげる。焼成は土で作った窯に薪を 3 時間焚き続けている。また、イロバスコの土器、素焼き品もある。

c 中国製の安価で丈夫な陶磁器物が大量に出回っており、高価なものより使いやすくなっている。

d 焼き物は重労働で、儲けが少なく、後継者も減ってきている。

(ク) 連絡所での意見交換結果 (*活動現場視察前に行った。)

a 配属先 (エル・トランシット) の状況

以前は (内戦前) ベルギー人の協力により (人件費の補填があったため)、最盛期にあったが、



写真7 ロクロ(ベルギーからの提供)



写真8 素焼きの作品(工房内)

現在は鈴木隊員のみであり、予算不足（赤字スレスレのところ）により、衰退傾向にある。予算は独自に稼ぐしかなく、給料も安いので、なり手がいない。

どのようにして後継者を見つけるかが課題である。子供のうちは熱心に習うが、若い女性のやり手がいない。ラ・バルマ付近には低火度で可能な（焼ける）材料がある。黒陶の原料で使えるものがある。

b 施設の状況

電気窯は断熱材が傷んでいる（写真 9）。補強が必要であり高火度もやりたい。この結果は将来の勉強のためにもなる。



写真9 電気窯(内壁が傷んでいる)

c 見舞い

ケガで休んでいる2ヶ月をマイナスと考えるのではなく、この機会にじっくりと見詰め直し、考えることが必要である、と励ました。

d 指導・助言等

大津団員：長期的展望（将来を含め）にたった苦勞をしてもらいたい。将来陶芸家としてきつと役に立つと思う。物の考え方、見方、感性を磨くことも大事である。

ウ 吉田利雄（美術－彫刻：1998.12.07～2000.12.06 10年度2次隊）

同隊員は長島隊員と同じセンターで活動しているということで、陶磁器の現場を視察するに合わせ視察した。

(ア) 鋳造用の施設を作ったが、教えているのが女性ばかりで、自分が去ったあとにそれを保守していける人がいない。

(イ) 生徒に教える時間に割かれて制作の時間がない。

(ウ) 意見が合わず一方的に押し付けられる。そのため、教員に教えるというのは難しい。

エ 関根香織（美術－版画：1998.12.07～2000.12.06 10年度2次隊）

同隊員も長島隊員と同じセンターで活動しているということで、陶磁器の現場を視察するに合わせ視察した。

(ア) 展示会を1度開いた。メディアにも取り上げられた。もっとやっていきたいので日本大使館のバックアップ（機材が古く草の根無償での対応）が欲しい。

(イ) リトグラフ・シルクスクリーンができる後任（3代目）を要請する予定である。同内容ができる人は日本に結構いるはずである。c/pはあと一年はCENARにいるはずである。

(ウ) 予算は校長により決定されるが、その決定が遅い。半年も待たされることがある。

(エ) 機材が古い（40年前のものもある）が、大学などの美術科より揃っているのが学生がCENARで製作するケースがある。

オ 大島慶一（美術－絵画：1998.12.07～2000.12.06 10年度2次隊）

同隊員も長島隊員と同じセンターで活動しているということで、陶磁器の現場を視察するに合わせ視察することになっていたが、時間の都合上、活動状況については聞き取り調査は行わなかった。

4 エクアドル共和国

4-1 一般的状況

(1) 位置・地形

エクアドルは南米大陸の北部、北緯1度4分～南緯5度1分、西経75度1分～81度2分にあり、太平洋岸のほぼ赤道直下に位置する。国名の“Ecuador”とはスペイン語で「赤道」の意味であり、まさに国名が示す通りである。本土から約100km沖の太平洋上のガラパゴス諸島を領有し、国土面積が約284千km²（日本の本州、四国および九州を合わせた広さにほぼ等しい。日本の0.75倍）の国である。国土はラ・コスタ（海岸地方）、ラ・シェラ（中央アンデス地方）、エル・オリエンテ（東部熱帯低地）に区分される。海岸地帯は国土の4分の1を占め、農業が盛んである。アマゾン地帯は国土の2分の1を占めるが、人口はわずか3%ほどにすぎない。ダーウィンの進化論研究の舞台となったガラパゴスは6つの島と小さな群島からなる火山島地域で、人口は約6,000人程にすぎない。首都はキト(Quito)であり、海拔2,850mの高地に位置していて、市の北方15kmの地点を赤道線が通過している。

(2) 気候・気温

赤道直下に位置するが、地域的に中央山岳地域（ラ・シェラ）、沿岸地域（ラ・コスタ）、アマゾン地域（オリエンテ）に区分され、気候もそれぞれ大きく違っている。海岸地帯は熱帯性気候であり、気温は25～28℃であるが、一部地域では35℃にも達する。山岳地帯はその高度により気候が変わっているが、海拔3,000m～3,000mの高原盆地は気温20度前後と温暖である。アマゾン地域は高温・多湿で雨は年中続き、気温は30度を超える。アンデス山脈西側の海岸地帯のうち、グアヤキル市から北部は低温なところが多く、6～11月の乾季と12月～5月の雨季があり、降水量も1,000mm以上と、農業に適した地域となっている。一方、アンデス山脈の東側斜面はオリエンテ地方（オリエンテ：雨季は5～8月で、年間降雨量は2,500～3,000mmあるいはそれ以上に達している）と言われ、アマゾンの最上流部に当たる支流が東に流れ、一面の熱帯樹林地帯を形成している。

首都キトの月平均気温（℃）は下表のとおり。

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
13.4	13.3	13.5	13.4	13.5	13.3	13.3	13.4	13.3	13.2	13.2	13.3

(3) 人口・民族・宗教

人口は約1,194万人となっている。首都のキトで約140万人（1995年央推定）、グアヤキルは約187万人となっている。民族構成はスペイン系を主とする白人（10%）、白人とインディオの混血（メスティーソ）並びにメスティーソとインディオの混血（チョロ）（40%）、インディオ39%、白人と黒人の混血（ムラト）、黒人並びにインディオと黒人の混血（サンボ）が11%となっている。人口の平均増加率は低下傾向にあるが、ラテンアメリカおよびカリブ地域の平均を上回っている。

メスティーソ、チョロ及びインディオは主として高地に住み、黒人、ムラト、サンボは低地や海岸地方に多い。東部アマゾン地方には、まだ原始的な生活を営むヒロバ族、シュアラ族、コンボ族等の少数民族が住んでいる。コステニョと呼ばれる海岸地域の住民は自由主義、国際主義で進歩的な傾向

が強いが、セラノと呼ばれる山岳地帯の住民は本質的に封建的、保守的、また、地方主義的傾向が強く、両者間の対立関係はしばしば政治面で不安定の一因となっている程である。

エクアドル国では宗教の自由が保障されているが、スペイン統治時代の影響もあって、国民の約80%がカトリック信者で、他にプロテスタント、ユダヤ教がある。

(4) 政治・経済

エクアドル国は、1822年5月旧宗主国のスペインから独立した共和国で、現在立憲共和制をとっている。中道改革派のジャミル・マワ・ウィット氏（人民民主党。1998年8月10日就任。任期4年。今回に限り、2002年1月までの任期）の大統領選出で政治の安定は回復し、選挙直前に行われた憲法改正で大統領権限が強化され、経済改革の実施に期待が高まった。1998年10月に半世紀にも及ぶペルーとの国境紛争にも終止符を打ち、政治的安定を目指している。

経済は、1995年はじめのペルーとの紛争により、経済情勢は急速に悪化した。1998年、石油の国際価格の低下、国家予算の削減、国際・国内投資の減少、エルニーニョ現象による豪雨災害等により経済活動は停滞した。そして、1998年の財政赤字（11億8千万ドル）はGDP比5%に拡大、税制改革による増収、ガス・電力に対する補助金打ち切り及び公共料金値上げ（ガス5倍、電気3倍、公共交通機関27%、石油12%）による支出削減に努力した。1998年4月、南西部グアヤキルで開催されたアンデス共同体首脳会議にて2005年までの域内サービス貿易の自由化などに合意した。1999年に入りブラジル通貨危機の影響でスクレが急落し、政府は2月に為替をフロートしたが、その下落は止まらず、3月初めに銀行閉鎖などの措置を講じた。これら経済の低迷の大きな問題点として対外債務（ほぼGDPに等しい）がある。

経済指標

	1995年	1996年	1997年	増加率 (90-96年平均)
人口(千人)	11,477	11,698	-	2.2%
総額GNP(百万ドル)	15,997	17,531	約19,000	-
一人当たりGNP(ドル)	1,390	1,500	1,590	0.8%
財政収支(十億スクル)	-549.6	-164.3	-	-
対外債務残高(百万ドル)	13,990	14,491	-	-

1USドル=7,135スクレ(1999年1月末)

※GDPの産業別構成(1997年) 農林水産業12.9%、鉱業17.4%、工業18.8%、サービス業他50.9%

(5) 社会状況

ア 雇用

エクアドルは農業国で、農産物が主要産品であったが、近年の産業GDP構成比では農業は10~15%程度に過ぎないが、依然として労働人口の30%以上を占める主要産業である。

全人口に占める就業人口の割合(35%)及びそのうち女性の占める割合(19%)共にラテンアメリカおよびカリブ地域の平均(各々41%、27%)を下回っている。

イ 人口動態

人口の平均増加率（2.5%）は低下傾向にあるが、依然としてラテンアメリカ及びカリブ地域の平均（2.0%）を上回っている。

ウ 保健医療

保健医療指標（妊産婦死亡率、医師・看護婦の1人当たり人口等、1980～1992年）はラテン・アメリカ及びカリブ地域の平均並みに改善されてきている。

エ 教育

初等教育の就学率は100%近いが、中等・高等教育では20%程度と低くなっている。識字率は90.1%（1995年）となっている。

オ 環境

森林破壊が深刻な問題となっている。沿岸地域の森林は95%が伐採、山岳地域では原生林の殆どが完全に喪失している。伐採等により土壌浸食、洪水、砂漠化を引き起こしている。

都市では、下水処理、汚染問題など等の環境問題が挙げられており、その調査・研究を実施し、環境保全対策を行っている。

4-2 国家開発計画

1993年に副大統領を長とする各省代表から成る国家開発審議会（CONADE）が設置され、経済開発及び外国との経済技術協力関係にかかる事項を管掌している。

同審議会によって以下のとおり、国家開発計画策定のためのアクションプラン（1993～1996年）が策定されている。現政権は、これに基づく新国家開発計画を策定中である。

（政策目的）

- a 社会福祉の向上
- b 公共サービスの向上
- c 国家の近代化
- d 諸産業の生産性向上及び生産高増
- e マクロ経済の安定と経済の活性化

（重点セクター及び分野など）

- a 農業
- b 製造業
- c インフラ整備
- d インフレの軽減
- e 対外債務の縮小

4-3 政府開発援助実績

(1) 我が国の ODA 実績

暦年	贈与			政府貸付		合計
	無償資金協力	技術協力	計	支出総額	支出純額	
95	24.23 (-)	13.14 (-)	37.37 (-)	21.29	-0.42 (-)	36.95 (-)
96	16.11 (34)	9.29 (20)	25.40 (53)	38.20	22.11 (47)	47.50 (100)
97	15.88 (62)	7.88 (31)	23.76 (93)	23.81	1.82 (7)	25.58 (100)
累計	89.93 (24)	94.58 (26)	184.50 (50)	308.54	182.81 (50)	367.32 (100)

(2) 国際機関・先進国等の援助動向

DAC 諸国、ODA NET

(支出純額、単位：百万ドル)

暦年	1位	2位	3位	その他	合計
94	スペイン 44.3	日本 33.1	ドイツ 21.7	73.9	173.0
95	日本 37.0	スペイン 29.4	ドイツ 28.1	64.8	159.3
96	スペイン 58.8	日本 47.5	ドイツ 27.1	73.7	207.1

国際機関、ODA NET

(支出純額、単位：百万ドル)

暦年	1位	2位	3位	その他	合計
94	IDB 18.9	CEC 8.9	UNDP 6.6	9.3	43.7
95	IDB 36.7	UNDP 14.0	CEC 12.0	15.1	77.8
96	UNDP 18.3	IDB 13.2	CEC 9.4	13.0	53.9

4-4 我が国の援助動向

エクアドル国に対する我が国の援助は、伝統的に我が国と友好関係にあること、南米諸国の中で開発の遅れている国の一つであり需要が大きいこと等から、無償資金協力及び技術協力を中心として援助を行っている。1996年2月にプロジェクト形成調査団を派遣し、保健・医療、鉱業、灌漑等の分野における協力を継続して重視していくことを確認した。

技術協力では行政、通信・放送、水産の分野を中心に各スキームでの協力を行っている。

有償資金協力においては、エネルギー分野、電気通信分野、農業分野及び債務繰延べなどの協力を行っている。

- 1991年から無償適格国（有償資金協力、技術協力を含む）
- 1992年プロ確結果：飲料水、灌漑、港湾、工業、病院、漁業（重点協力内容）
- 1994年プロ形結果：ラ・シェラ（山岳地域）→国内消費用作物
ラ・コスタ（沿岸地域）→輸出用農産物振
- 実施上の留意事項
 - 公共部門の改編実施中であり、実施機関の体制・能力につき確認が必要。
 - 財政が厳しい状況にあり、先方負担のローカルコストの我が国負担が必要

4-5 現地調査結果

(1) 協力隊員配置状況

エクアドル国の協力隊員の派遣状況(1999年9月1日付)は添付資料(エクアドル国の2)のとおり、派遣中の隊員は57名(うち女性隊員は31名)である。

同国における隊員の派遣はキト、グアヤキル、ロハなどの主要都市を中心に各州に広く派遣されている。今回の巡回指導対象の陶磁器隊員は、現在1名派遣されている(ロハからプヒリへ活動場所を異動)。今回はキト周辺隊員(5人)の活動も視察した。

(2) JOCV 調整員事務所との協議結果

ア 協力隊員派遣計画

現在の派遣隊員分野は、保健衛生、教育文化、スポーツを中心に派遣されている。

国家開発計画が策定中であるが、日本大使館、同国外務省等とも調整し今後は職能開発、社会福祉、農村の社会開発の3分野を重点的に、安全面に配慮しつつ、都市型配置から地方型派遣へシフトする方向で派遣したいと考えている。

具体的な基本派遣計画(1999年9月1日付)は添付資料(エクアドル国の5)のとおりである。

イ 職業訓練プロジェクトと隊員の派遣について

現在、谷 智美隊員(電子器機)が派遣されている労働省職業訓練センター(SECAP)キト校においてプロジェクト方式技術協力が検討されており(事前調査団派遣済)、協力隊員との連携について確認した。

プロ技と協力隊員との連携は相乗効果が期待されるが、現実には同一職場内において、専門家とのスキーム、マインドなどの相違・デマケ・技術レベル・思考方法等に起因する問題が生じる可能性がある。

従って、同プロ技の場合職業訓練センターにおいて「電気・電子機器分野」への協力を予定しており、同センターに対する今後の隊員派遣はプロ技と重ならない「自動車関連分野」の派遣を考えているとのことである。(プロ技の推移を待って考慮することも考えている。)

この点については同国だけでなく他国のケースにも同じようなことが言えるものと思料され、要請発掘段階からプロ技との連携をどのように行うか検討しておく必要がある。

ウ 今後の派遣計画とその実施体制(医療調整員の派遣等を含む。)

現在の派遣中の隊員数は前述のとおり57名であるが、今後の派遣人数としては約70名を目標にしている。(詳細な派遣計画は前述添付資料のとおり。)

また、現在は女性隊員が約6割を占めており、厳しい自然環境と健康管理を考慮すると、医療調整員の派遣が望ましいと考えている。しかし、現在は隊員事情に精通した嘱託医がおり、定期健康診断を含め医療調整員不在による対応上の不都合は感じていないとのことである。

エ 国際協力窓口の状況

これまで国の開発行政を一元的に所掌していた国家開発審議会(CONADE)が、新政権が発足した1998年8月10日に改廃され、その後は大統領府の計画事務局がこれを踏襲する形で推移してきたが、実態は稼働していない。その後1999年4月28日付政令812をもって国際協力を

統括する窓口として海外エージェンシー (AGECE) が開設された。

しかしながら、同機関は一部職員の確保・配置が進んでいるものの、今なお体制が整っておらず機能するに至っていない。なお、AGECE に対しては現在専門家派遣が検討されている (JICA 地域部準備室にて公募中)。

オ 国家開発計画

1998 年 8 月 10 日、新政権が発足したが副大統領府の計画事務局 (Planificacion) が所掌する国家開発計画の策定は現在も検討中であり公表されていない。

キ 他ボランティア団体・NGO の動向

エクアドルにおいて活動している主なボランティア団体・NGO は以下のとおり。

- ・アメリカ平和部隊 (Cuerpo de Paz)

活動中隊員数：170 名

活動分野：天然資源、健康、村落開発、家畜、農業、農業経済

- ・ベルギー (Seccion de cooperacion de Belgica)

活動中人員：専門家 4 名、ボランティア 30 名、大学 5 名

活動分野：公衆衛生、農業

重点地域：カルチ、インバプーラ、ロス・リオス、グアヤス州

- ・国連ボランティア

1999 年 1 月 27 日をもってエクアドル国での活動は停止し、事務所閉鎖

- ・その他の NGO

国境なき医師団がエル・ニーニョの被災者を対象に同国の NGO と協力して活動協力して活動を行っていた。その他に多数の NGO が存在するが、情報を取りまとめる機関が今のところ機能していないため、情報は少ない。

(3) 外務省経済協力局表敬結果

当方より調査団派遣目的等につき説明し、先方より以下の発言があった。

「エクアドルは大地震後の復興等の関係で経済的・社会的に困難を抱えており、日本から援助を受けていること(援助諸国の中で日本がもっとも援助が多い)、重要性を認識している。特に協力隊の派遣については、エクアドル国民・地域開発に多く役立っている。

現在の支援状況はアメリカの援助が減少傾向にあり平和部隊も減らされてきていて、同国が支援を受けているのは、日本、オランダ、ベルギー、ドイツである。

多くの国からボランティアが派遣されている中で、協力隊に期待していることは、支援のシステムが、外国人でありながらエクアドルの人と生活を伴にし、同国の生活上の困難を直視し、文化に合わせようとしていることである。このような協力隊員の持つ困難と、その中から生まれてくる援助は、地域を発展させるものであり、評価したい。」

また、当方より、現在は教育分野と社会開発分野を中心に派遣されているが、今後の協力分野への期待について質問したところ、先方より、「地域開発における農業・社会開発等の協力が欲しい。現在、各市・地域の市役所(役場)に地域開発のセンターを設置しようとしている。その中で、経済、そして行政面の隊員に入ってもらいたい。特に行政面においては指導的立場に立って、システムの確立をしてほしい。その他、農業、保健、村落開発などである。」との回答があった。現在、行政面の職種については協力隊は対

応(派遣)していないが、今後の課題として持ち帰ることとした。

さらに先方より、「現在は帰国する隊員一人一人に対し、外務大臣名で感謝状が直接贈っている。それほど、協力隊について評価をしている。日本からの援助がエクアドル国の経済的・社会的問題の解決につながることで、両国関係が良好であることを期待していること、さらに、日本の援助が今後継続してくれるよう期待している。」旨の言葉をいただいた。

(4) 隊員活動視察結果

今回の調査においては主として同国に派遣されている陶磁器隊員に対し、巡回指導をすることと、併せて今後の派遣計画等に資するという観点から他職種の隊員についてもその活動状況を視察した。

以下に各隊員毎の視察結果を時系列に取りまとめた。

ア 長谷川紀子(看護婦 1998.07.14~2000.07.13 10年度1次隊)

(ア) 勤務先: アトゥクチェ保健所(標高3,000mの低所得者地域)

診療科目は一般内科・簡単な外科(開口傷の縫合程度)・小児科・歯科(月水金)・産婦人科(曜日限定)。5人の医師が交代で診療を行っている。

看護婦は、長谷川隊員と看護助手2名体制である。看護助手というのは、3ヶ月程度の研修を受けて看護行為を行っている人たちではあるが、同保健所の看護助手は経験だけは豊富である。

(イ) 財源・診療代等

以前に入っていた仏国のカトリック教会系NGOが支援を減らし、医師の給与に一部、ボーナスのようなものの支払しか今は援助していない。厚生省その他政府からは一切経済的援助を受けておらず、あとは患者の診察代、一人一回5千スクレ(現地通貨100スクレ=¥0.7)を、医師・看護婦の給料及び薬剤購入の資金としている。しかし、5千スクレでさえこの周辺では大金であり、それさえ払えない人もいる。そのため、緊急の場合は診察代をとっておらず、保健所の経営はますます苦しくなり、銀行残高もなくなり、薬、ワクチン等が不足してしまう。薬代は高いが、コストより安く売っている。そのため、差額は同保健所の負担となる。

(ウ) ワクチン等

ワクチン 狂犬病、ジフテリア、三種混合、BCGなどを用意しているが、来訪当時不足していて、いつ入ってくるかわからない状況である。

(エ) 病例

狂犬病が非常に多い。野犬が多いため、噛み傷で来る人が多い。外科的な縫合もするが、問題は狂犬病に罹患しているかどうかである。その犬を捕まえて、一週間程度観察しないとわからず、狂犬病に罹患している場合には治療のために下の街の大きな病院を紹介することしかできない。

(オ) 機材

a 一般内科: 産婦人科も可能な診察台、その他に滅菌装置(1台)

b 歯科: 受入希望調査表では木曜日のみの診療とあったが、来訪当時月曜日だったが医師が来院していた(写真10)。歯に詰めものをする



写真10 診療所での歯科治療

治療も可能である。詰め物の材料はコンポジット・レジン。

c 産婦人科 ユニセフの援助により医師が市内から派遣されている。

(カ) 課題

a 栄養指導をしたいが、時間がない。予防接種の待ち時間を利用したいが、その間も同人は予防接種の補助などの実務に追われている。また、説得するだけのスペイン語を話す自信がない。

b 巡回看護が理想であるが、普段の実務に時間を割かれ、巡回する時間がない。巡回をやるならエクアドル人のc/pが必要であり、そのような人間を雇う経済的余裕はない。

(キ) 所感

隊員自身は保健所内での一般診療だけでなく巡回指導等も行いたいという気持ちがあるが、現状の活動（一般診療だけでも忙しくて時間が足りない状況）で精いっぱいであり、保健所の予算状況からも困難な状態である。ニーズが多くありながら対応できないもどかしさを感じているようである。

イ 平良和佳子（陶磁器：1998.12.09～2000.12.07 10年度2次隊）

(ア) 配属先 プヒリ・ヴィクトリア地区手工芸品製作者協会

なお、配属地域はPUJILI COMMUNITY VICTORIA DISTRICTとなっている。

(イ) 配属先変更後の活動状況

1999年9月中旬から任地変更により赴任・活動を開始し、サイトにおける陶芸家庭の状況を調査している段階である。この地区では各家庭が窯を持っており、そのような家庭が140世帯程度あると言われている。他の地区では高温焼成（1,200℃以上）が可能な窯を持っているところがあるが、その地区とヴィクトリア地区には技術交流がなく、ヴィクトリア地区では未だに低温焼成しかできてない。製品は首都キト



写真11 製土場

の卸し売り業者が来て、買いつけ、キト周辺で販売している。釉薬に鉛を多量に使用しており、健康面の安全から、その量の提言が必要とされている。伝統的な製法であり、鉛使用が有害とわかっていても、製品の嗜好性の問題で、使わざるを得ない状況である。

(ウ) 視察

本調査団はヴィクトリア地区の家庭3軒（いずれも窯を持っているところである）を視察した。その状況は以下のとおりである。

a Ms. Euloria Zangoquiza 宅

ろくろ歴20年の経験がある。アルフォレーロ（小瓶など）などの、大物の素焼きを行っている。高さ1mのものを作るのに4日間かかる。素焼窯があり、その中で1～2時間で700～800℃で焼き上げる。燃料はユーカリのおがくずで一回の量は高さ1.5mの山の1/3程度。製材所から入手している。

土は製土場から購入している（約¥200/10Kg）。



写真12 燃料のおがくずの山



写真13 けりろくろをひいている場面
(左)平良隊員、(中央)大津団員



写真14 足踏みでの土もみ

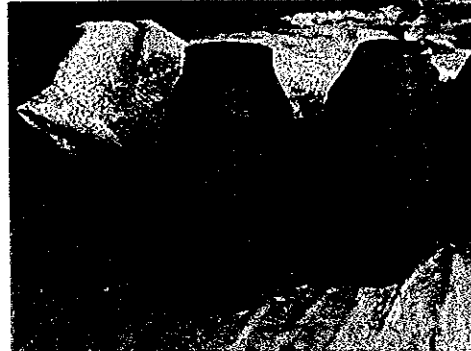


写真15 乾燥中の製品
乾燥切れのキズがある。

写真16のものは仕上げにはニス塗っている。
大津団員の評価では、出来上がりは肉厚で、おざっぱである。

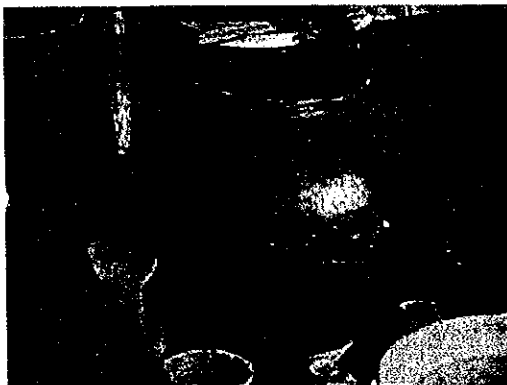


写真17 古い水がめ



写真16 完成品
光沢はニスによるもの

写真17はZangoquizaさんの祖母にあたる人が作った水瓶であり、張りがあって、良い仕上がりになっている。世代を経るごとに技術レベルが落ちている感がある。

助言・指導：

- (a) 薄めにろくろをひき、急激に乾燥させないようにする。特に風をあてないようにする。そうでないとひびわれがおきる(写真15)。実際にはビニールシートをかけた後、部屋の中で乾燥させたりとで、乾燥面には気をつけていた。
- (b) 鉄分の多い土を探し、黒陶を試してみる。現在使われている粘土より焼締まりがあり、燃料におがくずを使っているため技術的に可能である。

b Mr. Jose 宅

活動状況等：

製品として素焼き仕上げの瓶（カメ）を作っていた。



写真19 釉薬の原料
左から、シリカ、線、鉛粉、下に鉛の管

釉薬の原料（写真 19）：

- ・シリカ SiO_2 （クエンカ産）約¥200/45Kg.
- ・鉛 Pb（キットで購入）電話ケーブルに使っていたものを購入し、粉砕し使用。
- ・黄土類（鉄分を多く含んだ粘土）（キットで購入）約¥200/45Kg.
- ・銅線のクズ。

茶色・緑色を出すのに使用。いずれも、エンジンやモーターを利用した手製のミルマシン（写真 20）で粉砕し、伝統的な調合で鉛の釉薬を作っている。

評価等：

大津団員： 釉薬を作るミルマシンの構造はアイデアとしてすばらしい。釉薬として種々の素材（シリカ・鉛・鉄・銅）を使用している。特に鉛については低火度釉の溶剤としてほとんどの製品に使われている。

c Mr. Raul Pacheco, Ms. Elpa Pacheco 兄妹宅

活動状況等：

花瓶などを作っている。妹のほうは、指に乗る程度の大きさの小物を作っていたがとても器用に上手く作り上げていた（写真 21）。



写真18 食器類
鉛を使った緑釉



写真20 ミルマシン



写真21 親指大の焼き物

窯は鉛を焼く窯、素焼きの窯、本焼き窯を持っている（約 800℃程度の焼成）。窯をつくる値段を聞いたところ、約 150US ドル程度で出来るとのことである（写真 22）。

評価・指導等：

大津団員： 双方とも性格（几帳面）が出ているが、もう少し丁寧な製品作りをしてほしい。しかしながら、ここでも鉛を釉薬に使用している。単価的に安価で焼き締りのある物をつくるために、鉄分の多い土を使つての製品づくりを試すこと、あるいは、今使っている粘土の中に黄土類を混ぜてつくってみてはどうか。

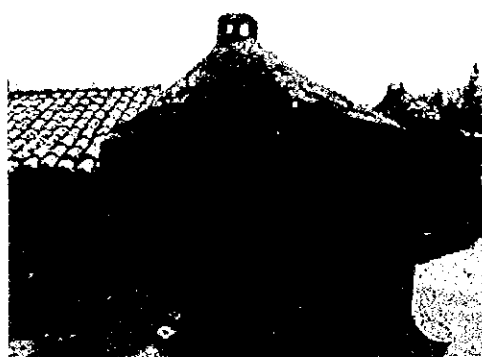


写真22 窯

d 瓦製作現場（写真 23）

サイトの視察からの帰途途中で瓦を焼いているところを視察した。月に 2 回程度焼いているとのことである。3,500 個/回で約 100US ドルの売り上げ（学校の先生の給料が月 100US ドル程度）があるが、燃料費（おがくず）を差し引くともうけは約 6 割それから人件費が引かれる。



写真23 瓦焼き現場

ウ 佐々木英恵（体育：1999.04.06～2001.04.06 10年度3次隊）

（ア）配属先 ルス・エミリア・サァ小学校

9月から10年制になっているらしいが、同小学校は従来どおりとなっている。

（イ）実施体制

校長 1 名、先生 5 名、英語教師 1 名（英語は 1 年生から学ぶことになっている。）、隊員 1 名（体育・図工）、生徒男女合わせて 137 名である。

（ウ）予算

教師の給料については文部省より支払われているが、校舎などの管理費については PTA が負担している。

（エ）授業

授業は 9 月中旬～7 月中旬（同隊員は 6 月の第 3 週から授業開始）までで、6 時間授業。7:30～12:30 までが授業時間となっている。45 分（1 時間授業当り）の 6 時間授業で途中に 3 時間目と 4 時間目の間に 30 分の休憩がある。授業時間は以下のとおり。

1 時間目 7:30～8:15 2 時間目 8:15～9:00 3 時間目 9:00～9:45

4 時間目 10:15～11:00 5 時間目 11:00～11:45 6 時間目 11:45～12:30

（オ）活動内容

佐々木隊員は週に 18 時間（1～6 年生まで各々体育 2 時間、図工 1 時間）を教えている（月・

火各 3 時間、火～金各 4 時間)。体育は地元の各小学校の体育大会が開催予定であり、それに向け練習をする予定(詳細不明)。

視察当日(10月6日)の体育の授業(5年生)においては60m走の練習をしていた。

図工は絵描きなどを行っている。絵の具が少ないため(価格が高い)、ポスターカラーを使っている。図工セット(クレヨン、糊の代わりにボンドなど)も使っている。

(カ) 所感

子供たちはとても明るく楽しく授業をしていた。素直な子供が多い。男の子は元気があり、女子の方が先生の話をよく聞いている。隊員の指導により、運動時のかけ声とか、挨拶など簡単な日本語も少し話している。前任者が不便を感じたトイレについては草の根無償で衛生概念を含んだ環境教育という目的を兼ねて教師用トイレが建設され有効活用されている。教師の給料以外、学校の運営維持管理費はPTAの負担ということもあり、生徒の教材など十分ではない状況であるが、各先生・隊員ともに創意工夫して授業を行っている。

エ 谷 智美(電子機器:1998.04.07~2000.04.06 9年度3次隊)

(ア) 配属先

労働省職業訓練センター(SECAP)、キト校(CERFIN)

(イ) 実施体制

科長: Mr. Wigberto Vizquete

学科: 5科(電気電子機器科、他4科)あり、電気電子機器科に谷隊員が配属。電気電子機器科の先生は11名。同科の生徒は約200名であるが、加えて40名の企業でのインターンの生徒がいる。

(ウ) 授業(コース)

コースは基礎から学ぶ人は3年~3年半かかる。企業で働きながら学ぶ人で、ある程度、技術を持っている人は1年~1年半で終了するようになっている。その他企業等の希望により種々のコースも設定されている。

センターの授業時間は二部制となっている。

7:00~14:00(基礎からの若い人対象)、14:00~19:00(働いている人対象)

(エ) 活動内容等

同センターの教員6名に対し、シーケンサーについての指導(ハード、ソフト)を行っている。指導には約3ヶ月程度要する。任期終了までこれを中心に活動する。その講義に基づき、教育は中級、上級レベルの生徒に対する講義を行っている。

(オ) 所感

4代目ということもあり隊員に対する理解度が高い。同隊員に対する評価も高い。

労働省のセンターでもあるため、組織等もしっかりしていて隊員にとっても活動しやすい環境の配属先であると感じた。また、教員ともうまくやっている様子であった。

指導に使っている機材については、JICAの単独機材供与にて調達された機材であり、丁寧に使われていた。

オ 豊口靖子（小学校教諭：1998.07.14～2000.07.13 10年度1次隊）

(ア) 配属先

ヒデヨ・ノグチ小学校（公立）（キトから30 km）。1930年設立（その20年ほど前まではガジャバンバ小学校）された地域で歴史のある学校である。

(イ) 学期

10月（学年始め）～翌7月、8～9月は夏休み。

(ウ) 予算

教師の給与は国の予算で支払われているが、学校の運営費、教材費についてはPTAが負担している。

(エ) 実施体制等

職員：校長1名（Ms.Lada Patricia Benalcazar Aguayo）、教師6名（1名欠員）、
隊員1名

生徒：288名。1年生、2年生は各2クラス、3～6年生は1クラス。最大60人/クラス。

(オ) 授業

1～3学期まで 7:30～12:30

(カ) 指導（活動）内容

1～3年生：各週、音楽と体育各1時間（45分）授業

4～6年生：各週、音楽2時間、体育1時間授業

音楽：歌、リコーダー（3年生以上）、リズム遊び、キーボード演奏、初歩的楽典指導、毎週水曜日の朝会時に全校で歌を歌う

体育：縄跳び、ボール遊び（サッカー、バスケット、ドッジボール）、持久走、柔軟運動の実施（体が堅い生徒が多い）

国語、算数、理科、社会は教科書がある。

教科書は以前無料であったが、現在は有料となっている。

(キ) 課題等

- ・実験、観察など体験的に学習する場合は殆どない。
- ・年間計画がなく、学校行事が入ったりして授業ができないなど、無計画である。時間にルーズである。
- ・学校の校庭がコンクリート舗装であり、運動等に支障がある。（工夫して行っている。）

(ク) 所感

佐々木隊員の学校と違い、生徒が288名いるわりには校庭が狭く、コンクリート舗装のため使い勝手は悪い。また、体育などを行う際は転んでケガをすることもあるため、気をつかっている状況である。前隊員が購入したマットを使用するなど工夫をこらしていた。先生との関係も良好で評価されている。

時期は不明であるが、日本から送られた机、椅子などが教室にあり、それらに日本名が書き残されたままであることや、学校名に医学博士「野口英世」の名前が冠せられていることもあり親しみ易さを感じられる。

学校の運営維持管理費はPTA負担であるが予算手当てが少なく、施設環境（校庭、運動設備、校舎反対側が壁等で暗いなど）が悪い。

カ 東迫恵美（保健婦：1998.07.14～2000.07.13 10年度1次隊）

（ア） 配属先：ハンピ・ワシ保健協会（オタバロ市内）

（イ） 予算・診察料金等

1995年設立以来、国連人口基金（UNFPA）の援助を受けている。これまでに車両（1台）及び予算（5,000USドル/年）の支援を受けている。但し、それ以外の予算については詳細ヒアリングできなかった。診察料金（初診料15,000スクレ=約120円）、薬品料金を徴収しているが、いずれも他の近隣医療機関/薬局より5割程度割安となっている。

（ウ） 実施体制

理事長/医師（Dr. Milian Conejo）1名、医師3名（1名の歯医者を含む）、看護婦2名（a. 教育担当、b. 診察室内における診療介助、薬局管理）、協力隊員1名、地域伝統療法士等3名、事務員4名、合計14名

（エ） 勤務時間：8:30～17:30（昼休み13:00～14:30）

通勤時間約10分程度の場所に同隊員は居住しているとのことである。

（オ） 活動（指導）内容

看護婦1名と共に、主として一般診療部門での診療介助

- a 外来患者の準備
- b 処置時の介助
- c 使用後の機材の洗浄・滅菌
- d 綿球とガーゼ作成

時には、教育担当看護婦とともに、近隣地域を巡回同行し、保健ボランティアの育成を行っている。さらに、巡回指導後は看護婦がデータをコンピューター入力し、その後フォローに利用している。

（カ） 診療内容等

一般内科の他、歯科、西洋医学等、ひとつおりの診察等ができるようになっている。中でも、伝統診療を受診する人が多いとのことである。

（キ） 課題等

臨床検査のため検査室を建設しており、現在の保健婦隊員に加え、「臨床検査技師」の隊員を新規要請している。

（ク） 所感

町には他に一カ所病院があるとのことであるが、この診療所は一般内科等の診療を受けることができ、且つ安価な診療費等のため利用し易くなっている。診察用機材、薬保管状況（薬局も兼ねている）ともに整っているように感じた。

隊員は診療介助だけでなく、巡回指導による社会共同体（Comunidad）の現状の理解を深め、同地域の状況を十分踏まえた診療を目指したいとしており、活動の状況（診療状況等）を見ながら対応するようコメントしておいた。